



今秋のアメリカ大統領選挙に向けた序盤戦がたけなわです。共和党はどうかやらトランプ前大統領が独走態勢を固めたようなので、11月の本選は、4年前と同じくバイデン現大統領（民主党）とトランプ前大統領の一騎打ちとなる公算が大きいと予想されます。どちらが勝っても米国史上最高齢の大統領の出現となりますが、本選までまだ9カ月近くあり、直前まで何が起るかわからないのが米国大統領選の常です。

### トランプは候補資格があるか？

特にトランプ氏の場合、前回大統領在任末期の連邦議会襲撃事件（2021年1月6日）への関与問題が燃っており、この時限爆弾が爆発するかしないか。コロラド州などでは州最高裁が、米国憲法に照らして彼は同州での立候補資格はないとしています。これに対しトランプ陣営は、大統領在任中の行為については訴追免除が慣例であると示しています。現時点（2月半ば）では先行き不透明ですが、この裁判の結果いかんによってトランプ氏は立候補できなくなる可能性があります。ま



バイデン大統領（ホワイトハウスのサイトから）

## 政治家の品格と器量

### 危機に強い指導者を

さに前代未聞の異常な政治状況で、民主主義の最先進国を自負する米国の鼎（かなた）の軽重が問われているといえましよう。トランプ氏は、この連邦議会襲撃事件のほかにも、いくつかの民事訴訟を抱えています。その一つは、セクハラ（性的暴行）や名誉棄損で、複数の女性から訴えられています。例えば、1990年代にニューヨークのデパートに氏を訴えていた民事訴訟では、つい最近、同市マシオンハッタンの連邦地裁で8330万ドル（約123億4000万円）の損害賠償を支払うよう、陪審団が評決を下しました。もちろんトランプ氏はこの判決に不服で、法廷内で「これはやらせだ」「魔女狩りだ」など口走ったため、裁判長から退廷を命じられそうになったとか。トランプ氏は、このほ

### 米大統領の女性スキャンダル

か、ポルノ女優からも訴えられ、有罪判決を受け、多額の損害賠償金の支払いを命じられたことも。大統領を務めた人物がこのような女性問題で次々に訴えられるなど、普通ではちよつと考えられないことですが、米国ではそれほど珍しいことではない。周知の通り、トランプ氏は、1990年代に大統領を務めたビル・クリントン氏は、在任中にホワイトハウスの執務室で、若いインスターン、モニカ・ルインスキー（当時22歳）と数回にわたってわいせつ行為を行ったとして、危うく上院で弾劾されそうになりました。ただ、このときも、クリントンのわいせつ行為が問題になったというよりも、彼がわいせつ行為を行ったことを公に否定し、偽証したことが問題視されました。つまり、不倫行為自体ではなく、偽証罪という法律違反を犯したことが問題とされたわけです。そもそも、この件は基本的にクリントン夫妻のプライベートな事項で、第三者がとやかく言うべきものではないという考え方によるもので



トランプ氏（本人のフェイスブックから）

す。トランプ氏の場合も、いくら派手な女性関係や破廉恥行為があったとしても、法に触れない限り問題にならないというところで、法律問題と倫理問題とは峻別（しゅんべつ）すべきだということでもあります。トランプ氏自身もその辺のところは十分認識しており、腕利きの弁護士を総動員して、法廷闘争を展開している模様です。（2面に続く）

### 日本の場合 宇野宗佑事件

こうした米国の政治状況に比べ、日本はどうでしょう。日本の政界でも女性問題でつまづく人は昔から少なくありません。ここで真っ先に思い出されるのは、宇野宗佑元首相（1998年没）のケースです。若い方は宇野元首相のことをあまりよく知らないでしょうから簡単に説明しますと、彼は滋賀県出身のベテラン政治家（自民党）。

若い頃、一兵卒として終戦直前の満州や朝鮮北部に送られ、終戦と同時にソ連軍の捕虜となりシベリア抑留を体験。2年後に帰国、滋賀県議会議員を経て衆議院議員に。その後防衛庁長官、科学技術庁長官、外務大臣を歴任した後、1989年にリクルート事件で退任した竹下登首相の後継として、棚ぼた式に首相に就任しました。

米外交史上最もタフな交渉の一つとされているように、大変難しい交渉でしたが、日本側は宇野首相代表を中心に、「国難を乗り越えよう」とばかり一致団結して頑張り、ついに米国から譲歩を引き出すことに成功しました。そうしたこともあって、私は宇野氏の政治家としての能力や人柄を高く評価しており、その後外務大臣としての活躍ぶりから、内閣総理大臣としても立派な業績を上げられるものとひそかに期待していました。

このスカンダルのせいで、直後の参院選で自民党は惨敗、参議院では結党以来初めての過半数割れ。その責任をとって宇野内閣は退陣という甚だ不名誉な結果となりました（後任首相は愛知県出身の海部俊樹氏）。宇野さんも外務大臣でどまっていたればよかったものを、なまじ総理大臣に上り詰めたばかりにひどい目に遭い、晩節を汚したと言えそうです。

政治家のスカンダルは決して珍しいことではなく、現在でも「文春砲」などの標的となつて失脚する政治家が後を絶ちません。それはそれで自業自得、身から出た錆びだ、政治家たるものは常に身辺を清潔にしておかねばならぬ、ということでしょう。確かにその通りではありますが、正直なところ、私はちよつと違った見方をしています。

もう一人の大物  
田中角栄の場合

例えば、田中角栄元首相を例にとつて考えてみましょう。周知のように彼は高等小学校卒だけの学歴でしたが、「コンピュータ付きブルドーザー」と言われたほどの行動力を持った稀有な政治家で、「日本列島改造論」で知られました。私も現役時代に、国会内で何度かご本人に会ったことがあります。今太閤と

後見境もなく集中攻撃を

彼の一面を見ていただけで、彼が日本の発展にどれだけ重要な貢献をしたか、そして、これからまだまだ大きな貢献をなす人物であることを認識していたか。ただ前

### 「指二本」で 自ら墓穴を掘る

ところが、彼は、突発した女性スカンダルに足をすくわれ、就任後わずか69日、日本政治史上4番目の短命内閣に終わりました。この辺のいきさつはあまり品の良いものではないので、ここで詳述しませんが、興味のある方はネットで検索してみてください。かいつまんで言えば次の通りです。

宇野氏が首相に就任した3日後、「サンデー毎日」が、東京・神楽坂の芸妓が宇野氏を告発したという記事を掲載。それによると、彼女は宇野氏

の「情事」の代償として毎月300万円ももらうつもりが30万円しかくれなかったので約束違反だというわけ。つまり宇野氏は彼女に指3本を示し、これでどうだと言ったのを彼女は勝手に一桁多く誤解していたようなのです。一流の老舗料亭に上がるようなベテラン芸妓は決して顧客情報をお外ししないとされていますが、あいに彼女がアルバイト芸妓で、週刊誌にペラペラしゃべってしまったというのが真相のようです。

評されたその強烈な人間的魅力はいまだに鮮明に記憶しています。その彼もロッキード事件に引っかけた任期途中で失脚しましたが、私は今でも実に惜しい人を失ったものだと思っています。そして、その彼を容赦なく誹謗（ひぼう）し葬り去ったマスコミや評論家（とくに「田中金脈」を最初に大きく報道した故立花隆氏）の姿勢には違和感を感じざるを得ません。

当時のマスコミは単に興味本位と思われるほど執拗に元首相のあら探しをし、寄つてたかつて非難攻撃しましたが、それ

「我々は道徳堅固でトラファルガーの海戦に負けるネルソンを待つよりは、ハミルトン夫人と姦通してても、トラファルガーの海戦に勝つ方が幸福である（誰がいつ言ったかは不詳）

この私の考え方を裏付けるような一つのエピソードが民主主義の発祥地で、老練な外交手腕で知られるイギリスにあります。次にご紹介しておきます。

## 政治家の 品格と器量

### ネルソン提督 「英雄は色 を好む」?

この私の考え方を裏付けるような一つのエピソードが民主主義の発祥地で、老練な外交手腕で知られるイギリスにあります。次にご紹介しておきます。

「我々は道徳堅固でトラファルガーの海戦に負けるネルソンを待つよりは、ハミルトン夫人と姦通してても、トラファルガーの海戦に勝つ方が幸福である（誰がいつ言ったかは不詳）

前回の本欄で、政治家の「劣化」という問題をとり上げたのも、そういう私の積年の問題意識に起因するものであることを最後に付け加えておきます。



田中角栄氏（内閣広報室のサイトから）

元外交官。ハーバード大学法科大学院卒。元国連環境計画（UNEP）アジア太平洋地域代表、元外務参事官。退官後東海大学教授、現在はエネルギー戦略研究会会長のほか、外交評論家として活躍中。新城市出身、87歳。

描かれ有名になりました。こうした話は百年も二百年も昔のことで、女性の社会的な地位が飛躍的に向上し、男女の不倫・セクハラ問題の社会的な受け止め方や価値観も大きく変化した現在とは同日に語ることはできませんが、にもかかわらず、政治家の品格、器量と国際政治・外交関係における指導力、突破力を考える上で、一考に値するのではないかと愚考する次第です。これは、戦争などの国家的危機に限らず、大災害などの緊急事態における対応の在り方を平時から考えておくことが極めて重要だということでもあります。

この私の考え方を裏付けるような一つのエピソードが民主主義の発祥地で、老練な外交手腕で知られるイギリスにあります。次にご紹介しておきます。

「我々は道徳堅固でトラファルガーの海戦に負けるネルソンを待つよりは、ハミルトン夫人と姦通してても、トラファルガーの海戦に勝つ方が幸福である（誰がいつ言ったかは不詳）

この私の考え方を裏付けるような一つのエピソードが民主主義の発祥地で、老練な外交手腕で知られるイギリスにあります。次にご紹介しておきます。

「我々は道徳堅固でトラファルガーの海戦に負けるネルソンを待つよりは、ハミルトン夫人と姦通してても、トラファルガーの海戦に勝つ方が幸福である（誰がいつ言ったかは不詳）

この私の考え方を裏付けるような一つのエピソードが民主主義の発祥地で、老練な外交手腕で知られるイギリスにあります。次にご紹介しておきます。



「トラファルガーの海戦」(ターナー)